

前期：キリスト教思想と宗教哲学

オリエンテーション——宗教哲学とその基本問題

1. 宗教哲学の歴史と伝統 2. 理性と啓示 3. 悪と神義論 (4. 予定と自由意志)
5. 形而上学と神 5/15
6. シュライアマハー 5/22
7. トレルチ 5/29
8. ティリッヒ 6/5
9. ブーバー 6/12
10. 波多野精一 6/19
11. リクール 6/26
12. 研究発表 1 7/3
13. 研究発表 2 7/10
14. 研究発表 3 7/17
15. 予備日 7/24

<前回>理性と啓示

1. 宗教的認識論
2. 宗教→啓示という源泉 (言葉・聖書)
認識→感性・理性の能力

キリスト教神学における両者の接点としてのロゴス：啓示にして理性

(1) 宗教的真理とはいかなる形態の真理か

4. 啓示に対する「命題的な理解」(ヒック、1994、120)
5. 「宗教的真理の心的な公布が啓示であり、これらの真理を従順に受け入れることが信仰である。」
6. 20世紀前半の思想世界における「認識の存在論」の試み。
認識論から存在論への転換

たとえば、「命題的真理と出会いとしての真理」(E・ブルンナー)

7. 聖書の真理解
8. 神の人間との関係の出来事について

(2) 宗教と合理性

10. 宗教的認識あるいはその真理は「合理的」か。
信仰は迷信か？ 宗教と科学は対立するか？
11. 合理性の一元論 (狭い合理性) から合理性の多元論、コミュニケーション合理性へ
論理実証主義 言語ゲーム論
12. 対立図式：双子のドクマティズム、あるいは原理主義的自己絶対化
無神論的原理主義：科学 (= 無神論) のみが合理的であり宗教はまったくの妄想である。
創造論者：創造論こそが真の科学であり進化論は偽りの科学である。
13. 無神論的自然主義
14. 合理性はいかなる概念か。メタ概念としての合理性。
15. ヒック：世界についての複数の経験可能性 (= 宇宙の両義性)、宗教と自然主義。
16. 神の存在論証とは何だったのか、何なのか。
いわゆる「論証」を意図したものではない。プランティンガ (分析的有神論・分析的哲学。)
17. 合理性概念の批判的検討：クリフォードの「証拠主義的合理性概念」
18. 双子のドクマティズムは証拠主義的合理性概念に依拠しており、ここに問題がある。

19. 宗教哲学の課題：無神論的自然主義が要求するような論理レベルでの証拠主義的合理性という強力な議論をめざすのではなく、むしろ、経験の複数性、あるいは合理性の具体化についての複数性を認める、いわば柔軟な合理性へと合理性概念を拡張すること。

・後期ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論

・自己論から合理性概念へ：自律的自己を構成する物語性に注目することによって、物語するという行為における自己同一性（物語的自己同一性）と他者への伝達可能性との双方を確保する。「物語」「物語る行為」が、自己を構成する働きをすると同時に、コミュニケーションの場を形成する。証言（証し）。

↓

コミュニケーション合理性

20. 現代神学における合理性の問題。

カール・バルト『アンセルムス書』（「信仰の合理性（ratio）」として論じられ、『教会教義学』において展開された「神の言葉の神学」）とトランスのバルト解釈。

3. 悪と神義論

(1) 神義論とは？

1. 「悪」の現実と「神」の实在

悪・不幸・罪といった否定的な現実の深刻さと、善なる神の实在との両者を同時に論理的整合性をもっていかにして主張可能かという問題は、しばしば神義論（弁神論）として多くの思想家が取り組んできたものである。

宗教哲学の根本問題の一つといえることができる。

2. この問いはその名称がライプニッツによることからわかるように、神義論は基本的には哲学的問いである。しかし、それは常に実存的問いという側面を伴っており、問題の複雑さを生み出している。

3. 近世哲学における悪論の系譜。

ライプニッツ → ヘーゲル 本質主義？

カント → シェリング 実存主義？

「ライプニッツ自身も、悪の根が「無」のうちに、即ち被造物における「欠如」(privation) 或いは制限のうちに、存すると考えたアウグスティヌスやその他の人々の見解が、自分の思想に還元されると言っている (Leibniz, Discours de métaphysique. 30)。」(西谷、230)

「このように、転倒せる意志の高ぶり、神への反逆という罪のうちに、悪の根元、或いはいわゆる「根元悪」を見るキリスト教の思想は、キリスト教神学のみならず哲学においても、現代に至るまで悪についての最も有力な思想になっている。例えば悪の問題について最も深く考えたヤコブ・ベーメやシェリングなども、この考えの系列に属しているといっ

てよいのである。」(231)

4. 神義論：どうして善なる神は悪を黙認するのか？

- ・有神論は論理的に自己矛盾に陥っている。悪の現実には神の非存在を帰結する。
- ・神義論。

A：神は全能である。

神は全善である。

悪は存在する。

S：善者は自分ができるかぎりにおいてつねに悪を排除する。

(全能で全知で善なる存在者は、適切に排除できるあらゆる悪を排除する。)

全能者がなしうることに限界はない。

(全能者がなしうることに論理による以外の限界はない。)

↓

神は悪をふんだ世界を創造し、かつ、そうすることには十分な理由がある。

Q：神は自分が好んだどのような可能世界でも創造できたのだろうか。

十分な理由とは何か。

5. John Hick

The Augustinian Type of Theodicy:

The Fountainhead: St. Augustine --- Evil as privation of good stemming from misused freedom

The Irenaean Type of Theodicy:

The Irenaean Type of Theodicy in Schleiermacher

The Two Theodicies --- Constasts and Agreements

原罪と自由意志

喪失か不完全性か

(2) 神義論の二つのレベル

6. 北村敏泰「苦縁——東日本大震災 死と生に寄り添う宗教者たち」(2013年3月8日、宗教倫理学会・2013年度第一回研究会)

大震災の苦悩は、神義論的な問いなのか？ 天災あるいは人災？

悪の存在一般の問いと、このわたしに降りかかる不幸という問いとの相違。

7. 神義論の二つのレベルあるいは二つのタイプ

理論的と実践的（あるいは実存的）という二つのレベル

前者がいわゆる神義論。

↓

理論的レベルと実存的レベルとではその問題の「解決」の在り方が大きく異なる。

前者が未解決にもかかわらず後者が解決することがある（ヨブ？）。

前者が解決しても後者が解決しないことがある（大震災の苦悩）。

8. 実存的レベル：悪・苦難・不幸に直面した人間のうめき、嘆き、恨みであり、そこから発せられる「神」への訴え・糾弾。

↓

この実存的レベルでの問いは、理論的なレベルでの論理的解決によっては満足しない。

求められるのは、論理的とは別の形の解決、いわゆる喪の作業に比することができる。

これは理論の提示と言うよりも、気づきの促し・きっかけと言うべきものであろう。

これには通常一定以上の時間が必要になる。

神の恩恵の贈与性に気づくこと。

9. この解決の仕方が人生を大きく異なったものとする。

恨みを抱えつつその実存の歪みを抱えつつ一生を終えるのか、あるいは痛みを残しつつも恨みの超えて生きて行くのか。

10. パウロ。「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。」(ローマ 5.3-4)

ここで、パウロの言う「知っている」とは？

οὐ μόνον δέ, ἀλλὰ καὶ καυχώμεθα ἐν ταῖς θλίψεσιν, εἰδότες ὅτι ἡ θλίψις ὑπομονὴν κατεργάζεται, ἡ δὲ ὑπομονὴ δοκιμὴν, ἡ δὲ δοκιμὴ ἐλπίδα.

11. ヨブ。「わたしは軽々しくものを申しました。どうしてあなたに反論などできましよう。わたしはこの口に手を置きます。ひと言語りましたが、もう主張いたしません。ふた

言申しましたが、もう繰り返しません。」(ヨブ 40.4-5)

12. キリスト教思想において恨みの問い。

アンドリュー・パクの議論

悪(悪業・悪行)の行為者=罪人の赦しを、悪を被り恨みに囚われ者の癒し。

13. ハンナ・アーレント『人間の条件』: Labor / Work / Action (Speech)

活動の脆さ(frailty) : irreversibility / unpredictability

「人間というのは、自分たちは活動によって始めた過程については、どんなものでもそれを元に戻すことはできず、それどころか、その過程を安全にコントロールすることさえできないのである。」(365)、「自分が行なってしまったことを元に戻すことができない」「この不可逆性の苦境から抜け出す可能な救済は、赦しの能力である。これにたして、未来の混沌とした不確かさ、つまり、預言不可能性にたいする救済策は、約束し、約束を守る能力に含まれている。」(371)

「赦しの力」(power to forgive)と「約束の力」(the faculty to make and keep promises)。

「この二つ能力は、共に多数性に依存し、他人の存在と活動に依存している。」(372)

「人間事象の領域で赦しが果たす役割を発見したのは、ナザレのイエスであった。」(374)

「神によって許されることを望むなら、その前に、人間がお互い同志赦し合わなければならないのである。」(375)

「極端な犯罪と意図的な悪には、これは適用されない。」(375)

「最後の審判」(376)

「赦しは復讐の対極に立つ。」(376)

「約束の能力の安定力」「ローマの法体系が主張する、協定と条約の不可侵性にまで遡る」(380)、「契約論」(381)

cf. 旧約聖書の契約思想

「活動は人間の奇跡創造能力である。」(385)

14. 「イエスは言われた。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」(マタイ 18:22)、「人を裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれることがない。人を罪人だと決めるな。そうすれば、あなたがたも罪人だと決められることがない。赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦される。」(ルカ 6:37)

ἀπολύετε, καὶ ἀπολυθήσεσθε

<参考文献>

1. A・ブランディング『神と自由と悪と——宗教の合理的受容可能性』勁草書房。
2. 酒井潔・佐々木能章編『ライブニッツを学ぶ人のために』世界思想社。
「ライブニッツ小事典(用語解説)」
「悪(malum, le mal)」
3. シェリング『人間的自由の本質』岩波文庫。
4. 西谷啓治「悪の問題」(『西谷啓治著作集』第6巻、創文社)
5. スターヴン・T・デイヴィス編
『神は悪の問題に答えられるか 神義論をめぐる五つの答え』教文館。
6. John Hick, *Evil and the God of Live with Foreword by Marilyn McCord Adams*, Macmilan, 2007(1966).
7. Andrew Sung Park, *The Wounded Heart of God. The Asian Concept of Han and the Christian Doctrine of Sin*, Abingdon Press, 1993.
8. ハンナ・アーレント『人間の条件』ちくま学芸文庫。